百合丘こども文化センター

塚本千春館長
運営団体：公益財団法人
かわさき市民活動センター
（2019 年 10 月 4 日）

百合丘こども文化センターは、地域児童の健全育成を目的とした施設です。百合ヶ丘駅から徒歩 10 分。公園の一角に位置し、緑豊かな環境に囲まれています。乳幼児親子専用のコミュニティルームや地域の団体が利用できる集会室もあり、子どもはもちろんのこと地域の幅広いニーズに応えています。

■今の子どもたちは塾などで忙しいと思うのですが、何人くらい来館しますか？　学年による差はありますか？

水曜日は、大人も併せて 100 人ほどです。入れ替わりが激しいので、公園に遊びに行ったり、こちらに来たり。男の子が多いですね。自転車を漕いでやってくる。女の子は、友達同士で約束してから来る子が多いです。
1、2 年生は小学校のわくわくプラザを利用している子が多いのですが、3 年生くらいになると、自由に遊びたいとの理由で来る子が多くなります。

■ここではどんな遊びをしているのですか？

いろいろな遊びを体験してほしいので、ボードゲームを沢山揃えています。また、お友達がいない子がふらっとやって来ても、スタッフがマッチングしています。退屈してそうな子どもに、「あの子と遊んでみたら？」と、声をかけると、「うん、いいよっ」と、仲良く友達になったりして。

■お手玉やおはじきなどの昔遊びはやりますか？

昔遊びも結構やっていて、コマやけん玉は、独自の検定にして、認定表を玄関に貼っています。土日は、お父さんもコマに熱中し、子どもたちに披露していますよ。

■子どもが施設を利用する際は登録が必要ですか？

必要ありません。来館者名簿に名前、学年、連絡先を書き込んでもらっています。18 歳未満まで自由に利用できます。

■高校生も来るのですか。

割と来ます。小学生のころからずっと来ていて、隣の公演の広場でバスケットボールをしていたり。高校生になるとお祭りなども手伝ってくれます。「今年も手伝うよね～」とお願いすると来てくれます。

■地域の大人の方でも使えるのでしょうか？

団体登録が必要で、政治・宗教・営利以外という制約はあります。1 階の部屋は、子どもたちが授業中の時間帯のみ貸出、2 階の集会室は、午前・午後・夜間の時間帯で成人の団体活動に貸出しています。

■どのような団体が利用しているのですか。

趣味サークルから幼稚園の保護者会まで、45 団体ほどが利用しています。ピアノがあるので、音楽関係の団体さんが多いですね。なかにはウクレレなど楽器の練習で利用している団体もあり、乳幼児向けの「ゆりっこサロン」では、コンサートを開いていただきました。

■スタッフはボランティアで担っているのですか？

基本、職員が運営しています。平日の午後及び土日祝日は、原則 2 人体制です。百合丘小学校と西生田小学校のわくわくプラザの運営を併せて管轄していますので、平日の午前中はわくわくプラザ担当のスタッフもいます。年間 3 回ある運営協議会共催事業については、団体利用者の方々にボランティアで協力していただいています。

■スタッフは何か資格をもっているでしょうか？

放課後児童支援員や児童厚生員という資格があり、仕事に就いてから講習を受けて取得する職員が多いです。皆さん、子どもが好きでやっています。

■イベントの企画や運営は、スタッフが中心になって開催しているのですか？

地域の方からやりたいという声がまずあって、それに応えるような形で開催することも増えています。たとえば、「英語であそんじゃおう」は、西生田小のわくわくプラザに通っている子どもの保護者でアメリカ人の方がいらっしゃって、ボランティアで地域の子どもたちのために何かしたいと申し出があり、企画しました。英語の歌、ダンス、ゲームをしながら交流し、授業やランチタイムの様子など、アメリカの学校生活の話もしていただいたりと。昨年度はフランス語でした。異文化に触れる機会として、年に 1 回、定期的に開催しています。

■子どものころから異文化交流に接しているといいですね。現在、力を入れて、取り組んでいることはありますか。

今は多世代交流に取り組んでいまして、去年は「いこいの家」と折り紙大会を開催しました。ちょうど１月だったので、干支のイノシシを折りました。子どもたちも、年輩の方々もお互いに作品を見せ合い、逆に、名人の子どもが講師の先生に自作のドラゴンの折り方を教えてあげるという場面もあって、いい交流になりました。

■ 施設間の交流ができたのですね。

実は、打ち合わせ当初は、いこいの家とは場所が離れていることもあり、交流イベントは負担になるのでは、と暗礁に乗り上げそうになりました。でも、ターゲットを絞ったらできるかなと、あ、折り紙なら協力してくれるかもという話の流れになり。

■あえて、ターゲットを絞ったのですか。

はい、ただ漠然と「交流したい」といっても、なんで？って、話で終わってしまう。でも普段から、飾り用の折り紙作品を届けてくださる地域の方がいて。

一方で、こども文化センターにも折り紙が大好きな子がいて。考え方をコンパクトに「折り紙」に絞ったことで、子どもも高齢の方も、本当に折り紙が好きな人たちが集まりました。子どもたちも、親が申し込むのではなくて、自分から申し込んでくる子がほとんどでした。高齢の方からも「子どもたちと遊べて楽しかった！」との言葉をいただきました。

■同じ趣味でつながったのですね。ほかにも効果はありましたか。

この辺にお住まいの方に、この施設の存在を知ってもらえたことも大きいのですが、何よりも地域の人たちが知り合えたのが大きいですね。スーパーで出会ったときに、ああ、あのときの、という感じで。

■街のなかで、近所のおじいちゃんおばあちゃんと挨拶できる関係って、本当にいい関係ですね。

名前は思い出せなくても、顔は知っているような。今まで全然つながりがなかったのに、顔見知りになれたことは大きいと思います。

■ 百合丘こども文化センターは、「さんま丼まつり」など、面白い取り組みをしていらっしゃいますよね。

前館長から続いているイベントです。震災で一時休止したのですが、食育や日本文化の面からも、魚を食べることが大事だと思って復活しました。はじめは、炭火で焼いていましたが、かば焼き風にしたら子どもたちも食べやすいのではということで、復活後は「さんま丼祭り」として開催しています。子ども実行委員会のメンバーが、２ヵ月にわたり広報や準備活動を行っています。

■イベント当日の担い手も、こちらのスタッフで見つけているのでしょうか。

団体で部屋を利用している運営協議会のメンバーにお願いすることが多いですね。先日も、昔から絵手紙を描いている団体さんにお願いして絵手紙講座を開きました。10 人ほどの絵の好きな子が集まって。子どもは自由な発想を持っているので、大人が思いもしない構図で描くのですよね。お互いに良い刺激を受けていました。

■暮れの大掃除など、毎年、子どもたちも参加しているようですが。

普段、お世話になっている施設をきれいにしようという目的で行っています。館内だけではなくて、周りの公園も清掃しています。木が多いので落ち葉が 100 袋近く出ますが、子どもたちがとても頑張ってくれて。活動を通じ、大人たちとの交流も生まれています。

■地域と密着した活動で、そこから子どもたちはボランティアを学んでいるのですね。

ほかにもクリーンボランティア大作戦というイベントを年５～６回開催し、ペットボトルやお菓子の袋、タバコなど地域のゴミを拾ったあと、みんなでクッキングして一緒に食事することで仲間づくりもしています。地域の方にこの辺もきれいになったと喜んでいただきました。

■評価してもらえると嬉しいですよね。

子どもたちも、地域のためになれて、喜んでもらえてよかったです！と話してくれます。この間は、まち探検も兼ねて、商店街のポイ捨てされたビニール傘などのゴミも拾いつつ、最後に消防署にも寄って。

■小さいころからの地域デビューですね。運営していて、課題や悩みはありますか。

やはり、昔から協力していただいている方の高齢化が一つあげられますね。皆さんお元気ですけど、体力的に心配だからと、できることが次第に減ってきて。夏は特に、暑くて…厳しい、ということで。さみしいですね。そればっかりはできる範囲で協力していただくしかないのですが。子育て世代の方も忙しいですし、引き継ぎが難しいですね。

■全く知らない方にボランティアをお願いするのも難しいですね。利用している子どもの保護者や高校生など、やはり個人的な関係から見つけていくのでしょうか？

そうですね、広報紙の募集では、どこの誰が来るのかも分からないという不安もあります。利用団体さんなど、ふだんお付き合いしている方なら、ああ、あの方なら安心だな。じゃあぜひ、という形でお願いしやすいです。毎月でなくても、年1回でもお手伝いいただければいいなと。

■そういうつながりが大事ですね。ある程度、その方の性格が分かったうえでお願いしたいですね。

それが、一番よいのかなという気がします。ボランティアさんも、やる気はあっても、思い描いていた活動とは違ったということもありますので。

■いろいろ課題はありますが、将来どのようにしていきたいという思いはありますか？

多世代交流で、地域の方々が、ここで子どもたちとふれあうことで、いつまでも元気に過ごしていただきたいと思います。一方、現在、高校生のボランティアが活躍していますが、その子たちが大人になり地域のなかで暮らすようになるのかもしれない。就職すると難しいけれども、ボランティアで関わってくれるこの関係が変わらずに続いていくといいなと思っています。

■ここでの楽しい思い出が残れば、大人になっても、またちょっと時間ができたときに行ってみようかな、と。そういうつながりが残るといいですね。

以前、家庭環境などの問題で学校も休みがちで悩んでいた子が、ここで友達ができてつながって、行事を企画したり、友達同士でお祭りを手伝ってくれたり。大きくなった今は、アルバイトで忙しく、ほとんど来なくなりましたが、たまにやってきて協力してくれます。

■子どもたちが成長している姿が見えるとうれしいですね。

毎年、イベントにくる子がいますね。そうなると、子どもだけではなく、いつもお世話になっていますと、その保護者とも信頼関係ができてと。子育てが一段落した保護者さんにも協力してもらえるといいなと思っています。

■今回のお話を聞いて、地域の方と一緒に活動されていることがよく分かりました。

休日は、同じ部屋のなかにいる大人が自分の子ども以外の子も見てくださったり、一緒に遊んでくださったりして。また、お祭りや餅つき大会では、利用団体のボーイスカウトの指導員の方々にも協力していただいています。

■ こども文化センターは、子どものためにというところで、地域の方々に支えられて、また、地域のためにもなっているのですね。

今後も地域の役に立ちたいと思っています。日ごろから町会の方と施設利用や防災訓練などでお付き合いをしています。以前、登戸の事件を受けて防犯も必要だよねという話もあがり、警察の方に来ていただいて、地域防犯講座を開催しました。はじめてだったので参加者は少なかったのですが、今後は町内会の回覧も利用して、老人会など多くの方にお声がけして、参加者を増やしていきたいですね。

■交流を通してお互いに得るものがある。高齢の方もここでエネルギーをもらっているのですね。

はい、わくわくプラザでは老人会の方々と一緒に輪投げ大会を開いていますし、子どもたちによるデイサービスの訪問活動もしています。今後も多世代の交流を深めていきたいですね。

麻生市民交流館やまゆり

植木昌昭理事長
運営団体：認定ＮＰＯ法人
あさお市民活動サポートセンター
（2019 年 11 月 20 日）

麻生市民交流館やまゆり（やまゆり）は、麻生区を生活・活動の場としている人々が自由に集まり、交流し、さまざまな活動を行う施設です。市民ボランティア組織のあさお市民活動サポートセンター（サポセン）が運営しています。交流促進のほか、麻生区の市民活動支援の拠点として、さまざまなサポートを行っています。

■麻生市民交流館やまゆりは、どのような方々が利用しているのでしょうか？

やまゆりは市民団体が運営していています。2 階の会議室は、登録団体のみが利用でき、1 階のサロンは昼間なら個人でも 2 時間まで利用できます。1 階のサロンは、やまゆりの特長の一つで、平日の夕方以降、土･日曜･祝日はブルーシートをひけば、立食パーティなどができます。交流手段として、ある程度オープンなノミュニケーションも大事と考えているのですが、麻生区には、そういうスペースが少なく、一般のお店だとテーブル席で、近くの人と話せても、遠くの人とは全く話せずに終わってしまう。それでは幅広いコミュニケーションには繋がらない。そこで、サロン文化と称して、夜に1階フロアを開放し、昼間とは違った雰囲気のなか使い方の幅を広げていきました。

■その成果はいかがでしょうか。

多彩なイベントを開催できる環境が整ったことで、団体の会議室や印刷室の利用だけではなく、新しい客層、利用者を巻き込むことにつながりました。飛行機と同じで、空席が多いとペイができない、せっかく空いていても利用してもらえなくては意味がない。利用率 90%の背景には、開館当初は来客の少なかった夜間や土日の利用を促してきた面が大きいです。やまゆりの独自のもの、やまゆりの個性をどう出していくのか、それを突き詰めた結果が、数字に表れてきました。

■昨年、新ゆりアートパークスのボランティアを集めたことで、注目されましたよね。

昭和音楽大学の南にある新ゆりアートパークスはきれいに整った芝生公園です。大臣賞を受賞するほど、芝生の手入れを精力的に取り組まれていたのですが、近年、ボランティアが高齢化し、代表の方が困っていたんですね。そこで、僕が一肌脱いで、お付き合いのあるシニア団体を中心に声をかけ、ボランティアスタッフ募集の説明会を開きました。

■説明会は、身近な関係からお声がけしたのですか。

最終的に頼りになるのは、Face to face（フェイストゥフェイス）の付き合いなのかなと思います。人を集めるにしろ、何にしろ、日ごろの付き合いが大事。やまゆりでは長年シニアの活動が行われてきたから、声をかけることができました。人や団体を繋ぐには、やはり双方のことをよく知らないといけないと思います。

■募集した結果どうなりましたか。

最終的に新旧併せて 25 名のメンバーとなり、新たなスタートをきることができました。その結果、ただの雑草取りだけではなく、イベントが沢山開催されるようなり、きれいな芝生の上で、ヨガや外国人との交流イベントなどが開かれています。

アートパークスは道路に面していて柵がないので、周りから見られているのですね。何か面白いことをやっていると、私の団体もぜひ利用したいという声があがってきます。

■自然に広がっていますね。

アクションを起こしたら、うまく回転しはじめるのだと思います。はじめの一押しが大事。その一押しをサポートするのが、やまゆりの役割だと考えています。ほかにも（やまゆり事業の）区民講師の公開講座もそうです。講座を開くには、チラシ作成や会場準備だと何かと面倒に感じる。そこの面倒な部分は私たちがお手伝いしますよと。だからぜひ、一緒に講座を開きましょうと。

■区民講師公開講座は、区民を講師役として募集し、毎年開催している事業ですよね。もう10年以上続いているようですが、成果はいかがでしょう？

講座をきっかけに講師と受講者がつながり、講師を中心に新たな団体が立ち上がるケースも出ています。講師の思いが周りにつながった例ではないでしょうか。区民が人生のなかで得てきた知識や知恵は“地域の財産”だと思っています。これからも「この指とまれ」と手をあげた区民講師の皆さんの思いや熱意に応えていきたいです。

■やまゆりでは、区民記者も活動されてますよね？

区民の視点で、地域の情報を自ら発信しようと10年ほど前に「あさお区民記者クラブ」を結成しました。魅力的な活動をしている団体やコツコツと地道に活動をしている団体を取材し、年に3回、『あさおふれんず』という団体紹介の広報紙を発行しています。2019年は区と協働で、それまで取材した情報をまとめた冊子『あさおナビ2019』を作成しました。広報紙は左から右に流れてしまいますが、冊子になると形として残ります。冊子にすることで、地域デビューの相談窓口など、さまざまな場面で活用していただけるのかなと思っています。

■冊子にすれば、手元に置いてもらいやすくなりますね。

そう、そして利用しやすくなる。最近は、インターネットでさまざまな情報が手に入る時代ですが、気軽に手を取っていただける、紙のパラパラ感を残すことも大事かなと思っています。2019年版には区内で活躍している女性を集めた座談会の記事も入れ、読み応えある内容に仕上がっています。やまゆりや区役所に置いていますので、皆さんにもぜひ、読んでいただきたいですね。

■毎年開催されている、定年退職者の地域デビュー向けの講座「目指せ！アクティブシニアたちのセミナー」の話についても伺いたいのですが。

今から15年くらい前ですが、私自身、市民館で開かれた定年退職セミナーの初代の受講生でした。そこに地域の同じような年齢の方が集まりました。皆飲み友達がいない、居場所がない、という共通の悩みがあり、講座終了後に受講生同士でグループを立ち上げました。十数年経った今でもその関係が続いています。講座をきっかけに自分が非常に良い思いをしたので、同じ悩みを抱えている人が、ほかにも麻生区には沢山いるんじゃないかと思い、やまゆりで講座を続けることにしました。その際、定年退職“まがい”の人も参加できるよう、開催日を平日から土曜日に変えました。今年度で14回目になります。顔の見える関係性というのが非常に大事と考えているので、毎回、新しい会が立ち上がるよう担当理事が促し、できたグループは10団体にのぼります。

■講座の先を見据えて設計されているんんですね？

一般的な行政の講座は仕事になっている。○○講座を開催しました、これが成果ですよと。それでは、どんなに素晴らしい講座であっても、「今日は、いい話を聞いた」で終わってしまう。それではもったいない。その後につなげるフォローは、やまゆりの役割だと思っています。退職を迎えて、特に男性はみんな、寂しがっているんです。女性はすでにママさんたちのグループがあって、地域にも知り合いが多いかもしれない。けれども、男性は、川崎都民とまでは言わないが、東京の職場へ行って・帰ってという往復の生活。僕自身、地域に入るまでは、区役所の場所も図書館の場所も知らなかった。

■実際にやまゆりでセミナーを続けてみて、参加者に変化がありますか？

感じたのは、最初は仲間ができてうれしいんですよ。今日はゴルフ、明日はお酒とすごく楽しい。でも、サラリーマンの性というか、楽しいだけではだんだんと飽きてしまう。何かをやってみたい。地域のために何か恩返しがしたい。自分の存在を示すために、地域に何か爪痕を残したいと考える。それが自然の流れだと思います。そこで、思いを共感した人に運営に入ってもらう形にしました。そこには新しい世界が広がっていて、新しい友がいて、新しい発見がある。そこから、人脈が広がり、単なる遊びでは得られない楽しみが生まれてくるんです。

■植木さん自身が、地域のためにと思いはじめたのはいつごろですか。

同じく最初からです。先輩から「退職したら地域の情報紙に目をつけなさい」とアドバイスをいただきました。そこで、情報紙に目をつけていたら、市政だよりの麻生区版に、のちのやまゆりにつながる「新しい市民利用施設の検討委員会」の公募があり、応募しました。
はじめは、入ってつまらなかったらすぐに辞めてしまおう、と思っていたのですが、そこで地域で活躍する素晴らしい方々との出会いがありました。
当時「麻生まちづくり市民の会」という支援団体が活躍していて、そこの団体にも入れと言われ。入会したら、また新たな知り合いも増えました。
そして、やまゆりが立ち上がるころには、「お前、言いたいことを言っているんだから、運営に携わりなさい、

副理事長をやりなさい」と。言葉通り“流れに流されて”身を任せていたら、自然と地域のなかに入っていた。いい先輩、いい友達、いい仲間と巡り合えたと感謝しています。

■いい仲間と出会うのは、偶然の要素が強いのでは、と思ってしまうのですが。

僕が地域に入ったきっかけは、市民館の講座であり、市民利用施設の公募でしたが、ほかにもパターンは沢山あると思う。ひっかける策をいろいろと考えるということも大事。先日も市民館の講座で1コマ講師をしましたが、その縁で、2人の方に運営スタッフに入っていただきました。実際に人と会って話を伺うと、思いがけないところからつながりが生まれます。

■やまゆり開館当時の話を聞きたいのですが、当時、社会実験施設と呼ばれていたと伺っていますが。

当時は何もなかったんですよ。「何もないのに人が来るのか、お手並み拝見」と言われ、その言葉で逆にファイトが湧いてきた。どうやって賑わいを生み出すのかということで“賑わいプロジェクト”を立ち上げました。人を呼ぶなら音楽かな。音楽をやるなら、ピアノが必要だねと。そこで、シニアグループの仲間から家に使わないピアノがあるから、という話を聞き、寄贈を受けました。そうしているうちに有志が集まり、「やまゆりテック」という支援グループが生まれました。リーダーの元、サロン文化の創造を掲げて、カーテン、照明、PAと徐々に揃えていきました。逆に実験であるからいろんなことやってみよう。成功する実験もあるし、失敗することもあるのも当たり前。実験という言葉に“気楽さ”を覚え、それが成功したら楽しいという思いで、仲間に恵まれ、一緒にやってきました。

■一般的に、施設の運営ボランティアや事務を担う方は、なかなか集まらないという話をよく聞きますが、なぜ今もやまゆりにはボランティアが集まっているのでしょうか。

先に紹介したアクティブシニア講座などの役割は大きいですね。仲間ができて楽しい。しかし、いつまでもこんなことをしていてもいいのか、という出口が必要で、その答えの一つとして運営スタッフがある。地域のなかでウロウロしていた蟻が、ここには、こういう砂糖があったのかと気付くのです。運営スタッフは単に事務仕事をするだけではない。そこでの出会いで新たな展開も生まれます。たとえば、よさこいを踊りたいという声が女性スタッフのなかであがり、2年前にグループができました。先日も福祉施設で踊りを披露したそうです。

■たとえ事務仕事でも、人が集まると新たな展開が生まれるのですね。

よさこいとは別に、開館当時の話ですが、運営スタッフで多摩川の1滴の源流まで遡って歩いたことがあります。当時、二ヶ領せせらぎ館の初代館長をされていた方が運営スタッフに入って、あまりにも多摩川の良さを語るから、多摩川を学ぶグループを立ち上げました。2年間かけて1ヵ月に1日、下流の河口から上流まで日を分けて歩きました。歩くというのは会話を生むいいチャンスで、一緒に歩きながら、「やまゆりにこういうものがあったらいいね」、「こういう団体を立ち上げたいんだよ」と、いろんなことを話し合いました。会議だと雑談ができないけど、歩いていると気楽に夢を語れるという面もあって。そういうなかで、一つのチームワーク、連帯感が生まれました。

■やまゆりで窓口の仕事をしていたら、いつのまにか多摩川を歩いている、そのギャップが面白いですね。

目に見えているのは氷山の一角なんです。表に見えるものに対して、非常に、いいね、いいねと言われるけど、その下にどういうものが沈んでいるのか。実際には、運営スタッフが気持ちよく働いていただくために、懇談会やミーティングを開催するなど、理事が中心になって、その骨組みをしっかり支えていることも大事と思っています。今年も口コミで運営スタッフが15人も入ってきました。今は、50人位の登録があって、毎回、ローテーションで違うスタッフと組むことになります。

■毎回、違うスタッフと組むから、世界が広がってくるんですね。しかし、運営スタッフのシフトを組む理事さんも大変ですね。

少人数の信頼できるベテランスタッフだけの構成の方が組織としては楽なのかもしれない。新しい人を受け入れるのは組織として負担だし、どんな人が来るのか分からないのでリスクもある。ただ、教えることによって、こちらも得るものがあります。

■一般的に、多くのお金を出して、いかに条件に合う人を雇って、という考えに陥りがちですが、違うんですね

仕事としてやっていたら、つまらない。仲間と出会えるからここに来る。その日が楽しく過ごせるというのが、僕が、運営スタッフに一番求めていることです。
仕事をしている姿をみて、みんな楽しそうだなと。スタッフが毎日苦々しくやっていたら、入ってくる人はいないと思う。ボランティアをしてくださいでは、絶対に成功しない。「楽しみ」という肉付けがあるから集まる。それがないと、苦手な人がいるからという理由で、すぐに辞めてしまう。

■多彩なバックボーンを持った人が集まっているこそのノウハウですね。

多様な考えを受け入れる雰囲気づくりは大事ですね。お利口さんばかりでもないので、失敗も笑いに変えられるくらいの度量の広さや、頭のやわらかさも大切。お役所が運営しているのではなく、区民が運営しているので、ある程度の寛容さは不可欠です。

■確かに役所が運営するとトラブルなくという意識が強すぎて、お固い雰囲気になってしまいますね。

利用者さんもはじめはお役所サービスと勘違いしている人もいて、クレームを言ってくる人もいました。でも、「ここは全員ボランティアで運営しているのです。あなたがそうおっしゃるのなら、ぜひ一つボランティアに入って一緒にやっていただけませんか」とお願いする。そう返すと「ご苦労様です、お疲れ様です」という反応が返ってきて、逆に感謝される。

■クレーマーさえも味方に取り込んでしまう。確かに、怒るのもエネルギーが必要で、その熱意を利用しない手はないですね。市民活動の支援にあたって、利用者の団体さんや市民の方に向けて、伝えたいことはありますか。

まず、団体さんに熱い思いがほしいなと思います。会員の高齢化が進み、若い方が入らないという悩みを団体さんからよく聞きますが、団体のメンバーのなかからもアイデアや変わろうという意思がなければ、支援する側も難しいと感じています。

■団体のなかから変わろうという意思が大事なのですね。

それは、個人も同じで、周りから、本人の人生観を変えることはなかなか難しい。ですが、家から外に１歩出て、地域の人や団体とつながってみると、自ら変わろうとします。まずははじめてみようという本人の気持ちが、何よりも大事なのかなと思います。

■今後、やまゆりを、こうしていきたいなど、将来のビジョンがありましたら教えてください。

2 年前、やまゆり開館 10 周年の際に、やまゆりを運営するサポセンでは、Next10 構想を打ち出しました。
今までの 10 年は、やまゆりの施設の充実を図ってきたのですが、これからの 10 年は、コミュニティづくりのエンジン役として、人と人、人と団体、団体と団体をつなげていくことを宣言しました。
そのためには地域情報の一元化や、なんでも相談、地域人材の発掘を進めていきたいと思います。ただ、ちょうど、その構想を出したあとに、川崎市の方からも、これからのコミュニティ施策“希望のシナリオ”の話が舞い込んできました。ソーシャル・デザイン・センター（ＳＤＣ）が目指す方向性と、サポセンが目指す方向性は同じなので、これからは、ＳＤＣとどうかみ合っていくのか、という視点も大事かなと感じています。

■サポセンが SDC の旗振り役になるのでしょうか。

それはないです。いろんな分野を繋ぐにはサポセンでは限界があります。市民活動以外にも、企業は企業、福祉は福祉と、分野ごとに強い組織は区内に沢山あります。サポセンは指揮者にはなりませんが、大きなパーツの一部にはなっていきたいと思っています。

■今のところSDC構想は、イメージの段階ですが。

これから議論が進むにつれて、さまざまな分野とどう連携していくのか、その“横ぐし”をどう刺していくのかは、一つのテーマになるかと思います。ただ、前段階として、テーブルにいろんなものがのっていることが必要。今は、パーツパーツが個々に活動していますが、まず、麻生区には、こんな場や活動があるということをみんなで知っておかないといけない。パーツを繋いで、という話は、テーブルの上に出てからの話でしょう。

■いろんな組織や団体が協力し、まちを良くしましょうと、言葉では簡単ですが、実際には、どこで何をやっているのか、情報が共有されていないのが現状ですね。

そこで、現在、サポセンでは、区役所と一緒に“まちのひろば”という取り組みを進めています。テーブルの上に、人が交流できる区内の100の場をあげていきたいと考え、只今、区民皆さんから情報を募集しています。これが完成したら、区内にはやまゆりのほかにも

こういう場所がありますよ、と皆さんにお知らせできるようになる。やまゆりの会議室の先行予約の際には、登録団体さんに、ほかの施設も紹介していきたいと思っています。

■利用者さんの選択肢を増やしてあげるんですね。

何を食べるのかは団体（個人）が好きに選べばいいんです。まずはテーブルを作ってあげないと。おなかがすいた、おなかがすいている、という団体に対して、やまゆりに食べ物があるから、外で順番が空くまで待っていなさいというスタンスではなくて。

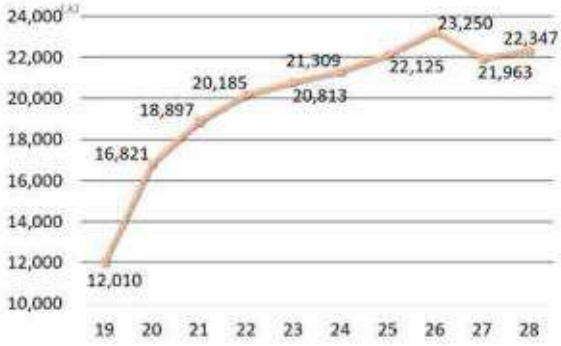
■確かに、意外に知らないことが多いですよね。家の近くにもっと最適な場所があるのに、いつも同じ場所を通っていたり。

海の底にあるものを陸へあげていく。その一つの方法が「まちのひろば」だと思っています。先に紹介した区民講師も同じで、地域で知られていない人財をどうやって表に出すのか、という視点ですね。また、まだ構想段階ですが、「やまゆりプロモーション」というのも考えています。やまゆりでは毎年、楽芸会（がくげいかい）という発表会を開催していて、音楽やダンス、芝居など 20 団体が出演しているのですが、皆さん出たがりで、人前で芸を披露したり出演機会を探したりしています。一方で、「グループホームで披露していただける団体さんはいますか」という福祉側からの相談も結構ある。双方のニーズを応える形で、楽芸会の出演団体を福祉施設などへ派遣できないかという構想です。

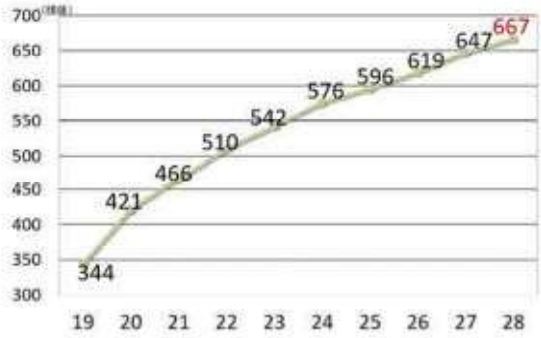
■団体さんの思いと地域のニーズをつなげていく。それが、やまゆりが行っているコーディネートなんですね。

繰り返しになりますが、そのためにもいろんな具材がテーブルにのっていないと。それを組織でやるならＳＤＣ（ソーシャル・デザイン・センター）しかないと思います。コーディネーターの具体的な話は、それからではないでしょうか。具材がテーブルにあって、はじめて調理ができる。この人とこの人とつながったら面白くなるのでは、という発想が生まれる。もっとも現状は、講座やイベントなどで集まる人は多いけど、何かの目的を持って活動している人は、まだまだ少ない。コーディネーターを調理人として例えるのならば、使命感を備えていることが何よりも大事だと思っています。

やまゆり利用者数の推移（H19年～H28年）



利用登録団体数の推移（H19年～H28年）



麻生市民交流館やまゆり